

R18

脅迫
(承ジョセ)

【目次】

貴方に背徳の刻印を.....	3
愛欲に溺れて.....	23
愛しい幻影.....	32
あの手が欲しい.....	34
世界の眠っている間に.....	37
夜だけのミストレス.....	45
愛してると言って.....	48
愛してると言わせて.....	50
【あとがき】.....	55

貴方に背徳の刻印を

それは「運が悪かった」としか言いようのない、事態だった。

娘のように思っていた、ひと回りもふた回りも違う女性からぶつけられ続けた熱情に、ジョセフがとうとう絆されて一線を越えてしまったその日——たまたまそこを通りかかった、自慢の孫空条承太郎に、ホテルから出てくるところを見られてしまったのだ。

幸い「彼女」は先にホテルを出ていたが、それでも日中の昼すぎに、ジョセフが一人でホテルから出てくるのが、不自然なのは言うまでもない。

「何をしていた？」との探るような問いかけに「いや、たまたま会ったゼミの学生とお茶をな…」と、咄嗟に不自然極まりない言い訳をしてしまったのも、良くなかったのだろう。

承太郎からほとんど首根っこをつかまれるようにして、戻ったホテルのフロントでは、有能なフロントマンが。

「おや、ジョースターさま。お部屋に忘れ物でも？」

なんて余計としか言えないようなことを述べて、トドメを刺してくれて。

それに「いや、部屋を新しく取りたいんだ。悪いが、前と全く同じ条件の部屋を、もう一つ頼むぜ」と返したのは承太郎だった。

「へえ、また随分と奮発したな。もつともてめえには端金だろうが」

ホテルの従業員が案内したのは、最上階にあるスイートルームだった。

部屋に入った途端に承太郎がつぶやいた言葉に、承太郎に続いて、おずおずと部屋に入ったジョセフは、がつくりと肩を落した。

気分は連行された犯罪者だ。

よもや、彼女と「結ばれた」その直後に、隠し事の通用しない孫に現場を押さえられてしまうとは。

悪いことは出来ないものだと思う。

ともあれ、承太郎に促されて、ジョセフはソファに腰掛ける。最高級のふかふかのソファが、今日ばかりはひどく居心地が悪いものと思えた。

「で？そのアマとは、いつから付き合っているんだ？」

部屋に入り、ベッドに腰掛けた途端に、そう切り出した承太郎に、ジョセフは観念するしかなかった。

ここまで来てはとぼけても無駄だろうと、仕方なく口を開く。

「一線を越えたのは、今日が初めてじゃよ。以前講義をした、大学のゼミの学生でな。前々から、わしを慕ってくれとったんじゃない」

「ふん、『慕って』なあ：最近の学生は奔放で、性に関してもかなりオープンなんだぜ？そのアバズレに、てめえのほうがからかわれて、遊ばれてんじゃないかねえのか？」

「そんなふしだらな娘じゃない」

思わずムツとして反論すると、承太郎が気に入らなげに眉を吊り上げた。

「…惚れてんのかよ？」

「年甲斐もないと言われるだろうが、スージーQ以来、初めて『心惹かれた』女性じゃよ」

「…ふん」

承太郎は立ち上がると、突然ベッドに置かれていたバスローブのひとつを取り上げて、ジョセフに投げつけた。

「どうでも良いが、まずはシャワーを浴びて来い。てめえからそのアバズレの安っぽい香水の匂いがして不愉快だ」

「…だから『アバズレ』ではないと」

想いを寄せた女性に対する、あまりに「無礼」ともいえる物言いに、再度反論しようとしたが。

承太郎にしてみれば、彼女は「祖父を誘惑して、祖母を裏切らせた諸悪の根源」となる。好感を持てるはずがないのかもしれない。

ましてや承太郎は素直ではないが、意外に「おじいちゃん子」で、幼い頃から自分を慕ってくれているのだ。

ジョセフは言われるがままにバスローブをもって、シャワー室に入った。そしてとりあえず承太郎に指摘された「彼女」の移り香を消すために、ボディソープをたっぷりつけて、身体を洗った。

しかしここで、ジョセフはよく考えてみる必要があったのかもしれない。

何故、承太郎がわざわざホテルの部屋を取ったのか。

何故自分にシャワーを浴びさせ、「バスローブ」に着替えさせたのか。

その答えが出たのは、バスローブを羽織ってとりあえずシャワー室を出た、その直後だった。

「ひやつつ!!」

シャワー室を出たジョセフが、ベッドの端に長い足を組んで座り込んでいた承太郎の前まで遠慮がちに行くと、いきなり腕を引っ張られて、ジョセフはベッドに倒れこんだ。

気がついたときには、ジョセフはベッドに仰向けに倒れこんでおり、そんなジョセフの両手を自らのもので押さえつけた承太郎が、上から体重をかけてのしかかって来ている。

わけのわからない状況に、ジョセフは目を瞬く。

「…承太郎？」

「ふん、あの女の香水の匂いは消えたようだな…このボディソープの香りは悪くない。てめえに合ってる」

鎖骨に鼻を寄せて、そんなことをつぶやく承太郎に、ジョセフは困惑する。「孫」と「祖父」の間の会話にしては、奇妙に思えたのだ。